

武蔵野日曜聖書講筵 復活節

復活の勝利

――ルカ伝第24章1～49節――

1969年4月6日

小池辰雄

武蔵野福音伝道所 1923年4月1日の復活祭 神の義と愛 「万理一空」 御霊の信仰 甦えらざるを得ない人 あるがままの自分を投げ出す 二人の旅人の開眼 キリストの勝利を与える 平安なんじらに在れ エルサレムに帰り見れば まことに不思議なこと 十字架の主と復活の主は離すことができない 倒るるは起たんがため 聖霊なんじらの上に臨むとき

【ルカ24・1～49】

1 一週^{ひとまわり}の初^{はじめ}の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2 然るに石の既に墓より転^{まろ}ばし除^のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍^{しかばね}体を見ず、4 これが為^{ため}に狼狽^{うろた}えおりしに、視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍^{かたわ}らに立てり。5 女たち懼^{おそ}れて面^{おもて}を地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。6 彼は此^{ここ}処に在^{いま}さず、甦^{よみが}えり給えり。尚^{なお}ガリラヤに居給えるとき、如何^{いか}に語り給いしかを憶^{おも}い出でよ。7 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付^つされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦^{よみが}えるべし」と言い給えり』8 ここに彼らその御言を憶い出で、9 墓より歸りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。11 使徒たちは其の言^{こと}を妄語^{たわごと}と思ひて信ぜず。12 「ペテロは起^たちて墓に走りゆき、屈^{かが}みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり」

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、14 凡て有りし事どもを互に語りあう。15 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。16 されど彼らの目遮^さえられて、イエスたるを認むること能^{あた}わず。17 イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言^{こと}は何ぞや』かれら悲しげなる状^{さま}にて立ち止り、18 その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓^{やど}り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業^{わざ}に



も言にも能力ある預言者なりしに、²⁰祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき。²⁵イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。³⁰共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えなくなり給う。³²かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』³⁷と云い給う。³⁸かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、³⁹イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、⁴⁰我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴¹「斯く言いて手と足とを示し給う」⁴²かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴³かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴⁴之を取り、その前にて食し給えり。⁴⁵また言い給う『これらの事は我がなほ汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』⁴⁶ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁷『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁸且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。』⁴⁹汝らは此等のことの証人なり。⁵⁰視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』



●武蔵野福音伝道所

キリスト教の三大節というのは、イースター（復活節）とペンテコステ（聖霊降臨節）とクリスマス（降誕節）です。もちろん、クリスマスが一番先の事柄ですが。今日は1969年の復活節で、皆さんにとっても非常に大事な一日だと思います。あそこに

「武蔵野福音伝道所」

と今日初めてこの言葉を掲げました。ここは今後、そういうような呼び方で呼んでいきたいと思っています。

昨日、D高等学校・中学校の入学式がありました。私は、

「初めてここにあなた方と一緒に私も今日は入学した。これは式であって式ではない。君たちの人生の大事なひとつの第一歩なのである。日本人は本来、道の民である。教場もこれは道場である」

と、端的に語りました。まあ、とんでもない新校長が現れたと感じますが。もはや、この日本は正直、学校の危機である。また、精神的な危機でありまして、私は絶対に福音の立場でしかものを言わない。それで迫害されるならば、いつでも私は退く。そういう角度で第一歩から立ち向かいました。

もう、なまやさしい現実ではない。今日の新聞をみても、もう秘密の兵器が考えられているらしい。来年の安保の時にはどんなことが起きるかわからない。私たちは、死んでも死なない生命を持つていなければ、これに戦いぬくことができない。そういう心構えからしましても、私たちの福音は絶対に使徒的な信仰でなければなりません。今の教会、無教会が何を言おうと、そんなことで動揺するような青年は、これは頼むに足らない。

どうぞ、今日いらつしやった方々はその角度でこの一日に立ち向かっていたきたいと思います。本ものが出てくると、必ず迫害を受けます。いろんなことを言われるときには、むしろ本ものである証拠であって、パウロが

「異端の首^{かしら}」

と言われた。「異端の首」と言われたパウロは実は、この福音の大黒柱であつた。

「その使徒パウロなくして今日のキリスト教はこれだけの多くの戦いに勝っていく

ことができなかったであろう」

と言われるような素晴らしい構造をもった人でした。もちろん、パウロがどうかしたのではない。パウロに化体^{かたい}したもうところの神の言、神の霊がこれをなさしめたのです。

●1923年4月1日の復活祭

私は昨日、ここに掲げた復活節の次第を夕方書いておりまして、さて何という題にしようかと思ったら、おのずから「復活の勝利」という題になったわけです。すべてのことが本当に主にある祈りをもつて進んでいきます。このキリストをうちに生きるような人になつ



たら、もう何の心配もいらん。本当の勝利ですから。

先程、特にご婦人のかたに「美わしの白百合」を歌っていただいたのは、私に一つの想い出があるからです。今ふと内村全集をひもといてみたら、やはりそのことが書いてある。1923年4月1日、忘れもしない。日を覚えていたので、開いてみたらそのとおりで、内村先生のその日記の一節を読んでみます。

「一九二三年四月一日（日）晴。復活祭の聖日である。花を以て講壇を飾り、婦人連に讃美歌四百三十九番「うるはしのしらゆり」を歌って貰ひ、復活祭気分の実を助けた。自分は前回「塩と光」の続きを述べ終つた後に「キリスト復活の実証」に就て語つた。キリストが今、實際に此世に在りて働き給ひつつある事、其事が彼が復活し給ひし何よりの好き証拠であると述べた。主キリストは生きて今此講堂に在し給つと語りし時に莊嚴の気分は全堂に充ち涉つた。文学博士加藤弘之、理学博士松村松年如き者が幾千人又は幾万人出て基督教を攻撃しやうが、復活せるキリストの上に立つ基督教はビクともしないと述べし時に自分ながら気が清々した。講堂はイツモの通り満員であつた。此世の所謂有識階級又は上流社会の人達も大分認めた。然し乍ら復活せるキリストの前に立ちては、智愚上下の差別は少しもなく、一堂頭を低れて彼の祝福に与かつた。誠に恵まれたる復活祭であつた。」

これが日記の一節ですが、その当時の雰囲気は私は今も彷彿として思い浮かべます。これは私が信仰に入つた第一回目の復活節であつたわけです。

●神の義と愛

ルカ伝24章は何回私はここでお話するか知りせん。常に新たなものです。何という一章であるかと思う。今日、祈祷会でやるところのペテロ前書4章も私の大好きな一箇所ですが、けれども、自由にお話いたします。

復活の主と言いましても――最初に歌つた「馬槽まぶねの中に」の讃美歌は日本人が作つた讃美歌の傑作中の傑作だと私は思いますが――この十字架の主をぬきにして我々は復活の主をまた思うことができない。イエスはいきなり天界にいふことの許される人でありました。

「自分はこんな苦杯は飲みたくない。もし、御意ならば取り去り給え。いきなりあなたのところへ私は行きたいんです」

と、ゲッセマネで神さまに祈られた。肉体が靈化するこののできる人でしたから。けれども、キリストは特別な死を遂げなければならなかつた。

これは普通の殉教者の十字架とは違う。イエスの十字架はただ一つの十字架であつて、いかなる死もこれと比べることができない。旧約の宗教の祈りの焦点を、彼の十字架において引き受ける。旧約聖書は十字架において焦点しているわけです。即ち、贖罪の宗教は、いわゆる大祭司でもなければ、いわゆる小羊でもない。イエス・キリスト自身が祭司と



なられ、イエス・キリスト自身が^{こひつ}羔となつて、旧約の宗教を完全に引き受けてこれを満たしてしまった。それを本当に廃棄してしまった。これは廃棄し成就するということで、同じことなんです。それがイエスの十字架であつた。神の義がここに立ち、神の愛がここに現れた。義と愛がはつきりとここに寸分ズレなく現れたものが十字架です。

であるからこそ、イエスは、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫んだ。彼は棄てらるべき人ではありません。本当の義人である。神の御意を完全に行うことが「義」であつて、いわゆる人間的な正義ではない。徳目の一つではない。義という言葉は、普通の人にはわからん。

「神の御意を完全に受けとつて、これを行ふること、実践すること、実存すること」

これが義である。その内容は同時に深い愛なのであつて、義と愛とは決して離れたものではない。

「なんぞ棄て給いし」

というキリストのこの言葉は、神の義が体现された、本願が成つたことに対するところの、全世界に対する「否」という抗弁の、全世界を相手にするところの言葉です。棄てらるべからざる者が棄てられるという。しかしながら、棄てられることによって義が成就し、罪に対するところの審判が完全にここで成就される。そして、贖罪の、罪を贖ふことの、その義を直ちに人に賜る。

「この義を汝ら受けとれ」

と。これがキリストの愛の内容です。「永遠の生命」とは即ち、義の生命が永遠の生命である。同時にそれは愛の生命である。十字架それ自身が義と愛のクロスしたものであつた。

また、「なんぞ棄て給いし」のこの御言は、この世において不当なことを受けて、そして迫害され、不当の死――誰にも顧みられず、あるいは多くの人に誤解され、あるいは虐げられ、いかなる弁護人もないところの、そういった死を死んだ人たちが幾人あるか――そのような犠牲の死、殉教の死に対する一つの大きな代言でもあります。

神さまの実に無慈悲なようなこの十字架の処置は、実は神の大慈悲、大愛であつた。私たちはこの十字架の事態を観念してもどうにもならん。私たちは本当に身をもつてこの神の大愛を、大慈を、本願を受けとるのでなければ、絶対にキリストの十字架は私たちに――頭でいくら分かりましても――受けとられない。普通の信仰はみな頭の理解の程度であつて、我々が本当に身をもつて受けているようなことでない場合が非常に多いわけです。

●「万理一空」

それはまことの砕けです。我々人間の砕けというものは、一時的な砕けはありましても、絶対に本当の砕けなんていうものはない。「砕けたる魂」とか「砕けたる心」というのが詩



篇51篇にあるものですから、つい

「どうも、私はまだ碎けておりません」

なんてやっている。そして、一生懸命で自分を碎こうとしている。その願いはいいけれども、そして、碎けないことに絶望することでもいいけれども、それで自分をいつも咎打っていたのでは、結局、本当の福音の世界に入れない。それはいわゆる哲学的な実存のひとつの面かも知れませんが。

この碎けはキリストがはつきり、もう普段から碎けておられた。普段から碎けておられたキリストが本当の碎けを受けとったのがこの十字架です。申し上げている通り、

「自分は何者でもない」

と。神さまの前に自分を何者としなかったということが、キリストの碎けの姿なんです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

とは、彼自身が本当に霊が貧しかった。

私のこの「無」という言葉は――言葉ではない――その事態は本当に年とともにありがたくてしょうがない。柳生流の剣の奥義も最後は無刀である。無刀流なんです。柳生流は即ち無刀流です。刀を持っても持たざるごとし。パウロが言っている、

「在れども無きがごとし」

というのと同じことです。まだ剣を自覚しているうちは本当の剣ではない。私は画家もそうだと思う。持っている筆がまだ筆であるうちはダメです。無筆である。無筆の筆が動くところに本当の絵が転じてくると思います。あの武蔵の『五輪の書』の終りの方にも、「無理一空」という言葉が出てくる。諸々の理は一つの空に帰するということ。

まだ、理をして、理として理屈を言っているうちは本ものの世界ではない。理に絶するところのもの、それを「無理」と言ったらおかしいことになります。

「無理が通れば道理引つ込む」

というのは、それをこの角度からいうと本当のことだよ。そんな道理なんていうものは本当の無理の世界に至ったら引つ込まなければならぬ。これは通俗の言葉以上の真理を含んでいることを、即ち理なき世界、本当の理が今、私は皆さんと語りながら分かった。無刀であり、「万理一空」の事態です。キリストやお釈迦さんはみなこの「一空」の世界なんです。何も無い。何も無いから、もの凄い理が、霊法が、霊理が働く。そして自在である。どうして、クリスチャンがこのことに気がついてくれないかと思う。神学をひねくりまわしたり、聖書の註解をどうのこうのと、

「いや、これはこういう意味だ、ああいう意味だ」

なんて、何を言っているか。意味の世界ではないぞということなんです。

皆さんがこの聖書を読んで、その文字の奥から響いてくる、この力、響き、光、呻き、叫び、そういうものを受けとるような読み方にならなければダメです。この御霊がくればそうな



ります。もう本当に次元が違う。そういう受け方をして、聖書に立ち向かってください。

「十字架の主」ということです。キリストの十字架と言うよりも、十字架の主です。全世界を地の涯^{はて}までも担い、歴史の終りまでも担っているものがこの十字架です。これに背くかぎり、20世紀の文化は滅びる。審判を受ける。自ら審判を招く。今の日本の精神的な分裂症、異常さはもう生易しいことでない。いや本当に病膏^{やまいこうもう}盲に入っている。これは絶対に実は、大事なものが隠されている。人間であるかぎり、良心があるかぎり、その魂があるかぎり、まだ一縷^{いちる}の望みはある。魂があるかぎり、その魂の一番深いところに響く何かを受けとれば、

「今まで自分たちは悪夢を見ていた。何という暗雲の中に閉ざされていたんだらう。」

そういうことであつたか」

と。そういうものを与えるのでなければ、もう救いはない。それは雲をつん裂いて臨むところの、この福音の聖霊の言葉によらなければこの呼び覚ましができない。

●御霊の信仰

今日は、そういう意味で、ここにいらつしやる方々は本当に大事な集会に臨んでいる。これは絶対ですよ。何がどうあつても、もうこのキリストの御霊の世界に来ましたら、本当に楽で平安でしょうがない。何ともありがたいな。全世界の何を持つてこようと、この見えないところの御霊一つと代えるわけにいかん。どんなものとも絶対に代えられないと。一体、無教会でそんな告白をしたやつがあるかというんだ。内村鑑三先生といえども、私は聞かない。内村鑑三先生も藤井武先生も、

「前進せよ」

と言っているんだ。

「私の真似をしろ」

なんて言っているのではない。だから、私たちは前進するんです。

そこへいくと、アッシジのフランシスとか、ザビエルとか、素晴らしい魂です。私はザビエルのことをもつと知りたいと思う。インドのガンジーなんかもそうですよ。あれは『バガヴァド・ギーター』(?)によつて養われた魂だ。サンダーシングなんかも。けれども、皆さん一人びとりがザビエルやサンダーシングのようなことに質的にはなる。いや実に「パウロさん、ペテロさん」と、親しく言えるわけです。

聖霊は一つです。このキリスト道に入つたならば、これを受けとらないで、いい加減なところで満足していたらダメです。99まではダメです。100と99は大違い。たった1なんて思つてはいかん。あなた方は100点満点の人にならなくては。「私は99点です」なんてね。私はだから、学生が100点くらいの答案を書いても、満点はなかなかやらない。99点だ(笑)。まあ、これは半分冗談ですけども。消しゴムで消したりなんかしてであると99点だ。答案用紙に



完全無欠に書いたなら、それは100点だけれども。この御霊の信仰それ自体は、キリストがくれている100%のものです。我々自身の現実には、もう私なんかはマイナス99だろうけれども。しかし、この100というのがもの凄く1に結晶して入ってきた。これがあるがたい。

●甦えらざるを得ない人

では、ルカ伝にいきましよう。

1 一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。

そういうことでもやはり、本当に愛の行為をするのは女性でありまして、男性はダメです。だいいち、まだキリストが死なない前に、壺を割って価高きナルドの香油を、

「もう私はこの壺の中に貯えません、全部あなたに注ぎます」

と注いだ。これをキリストが、

「この女のしたことは全世界に宣べ伝えられるべきである」

と言われた。葬りを十字架の死の前にやった。ああいう献身的な気持ですね。

2 然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの

屍体を見ず、4 これが為に狼狽えおりに、

あるがままに書いてある。

視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。5 女たち懼れて面を地

に伏せたれば、

その通りでしょう。

その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。6 彼は

此処に在らず、甦えり給えり。』

と。ゲートの『ファウスト』のあの復活のところの文句は私は大好きで、さすがにゲートだと思っても読むんですが。

「朽ちるものから甦ってしまった」

という句がある。そういつた朽ちるような死の世界には彼は属さない。彼は本当に霊生を身につけていた人である。我々はどんなガラクタでありまして、この甦りの主を、キリストを受けとっているなら、皆さん一人ひとりが霊生の人です。霊の生命をこの肉体の奥に持っている。これなくてして、何の信ぞや、何の福音ぞやと。喜びの音信というは、

「死んでも死なない」

ということですよ。どんな冷たい世界も温める力を持っている。どんな闇の世界も光で照らす力を持っている。「甦えり給えり」と。これは本当は

「甦えらせられた」

という形で使っている。パウロが書簡の中でも、神の聖力が

「死人のうちより甦えらせ給いしところの」



という言い方をよく言ってます。

尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。⁷即ち「^{なお}人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり』

キリストはこれを三度言われた。

「自分は三日目に甦える」

と。金曜日に十字架されて、次の日のまた翌朝の、ちょうど三日目に甦ると言われた。弟子たちもそれを馬耳東風で聞いている。聞いていながら一向受けとつてない。聞けども聞こえずというわけだ。イエスは甦えらざるを得ない人なんです。何も実証はいらん。彼の本質が私たちにかく呼びかける。イエスがもし死んだままであったならば、世の中にこんな不合理なことはない。ところが、とにかく神学者や聖書学者というものが、

「さあ、どんな具合にして甦えつたんだらうか。いろいろ記事があるが、どれが本当だろうか」

なんて、いろいろなことをやっている。そういう歴史の実証的な探究は、この頃はだいぶ止んできたけれども、今度は、ただ神学的に、ある一つの結論を言つて、それで一つの象徴になってみたり、いろんなことになっている。「非神話化」なんて言っている。

けれども、ルカ伝の記事がそのことを実証すると同時に――ルカ伝の記事がどうであろうとも――神の義を完全に実存した人が、罪なき者が死んでしまつてお終いということほど不合理なことはない。神の生命を生命したものが途中で消えてしまうほど不合理なことはない。「2+2=4」というように、キリストの甦りは明らかにこれほど至極当然なことはない。皆さん、本当にはらわたの底からそう思っていますか。それならいい。

「復活」^{よみがえり}ということは何も息を吹き返したなんていうのではない。もの凄い霊的な生命として現象し、霊界に姿を消してしまう。自在です。また、戸を閉じた所にも入ってくる。終りの方に書いてあるでしょ、

「お魚があれば、食べるぞ」

と言つて食べた。私は神学者のあるグループにいたときに、あそこの記事にきたら、みんな笑った。

「へー、君たちは笑うのか」

と。私はその群から出てしまった。今でも、みんな一流の連中です。そういう人たちのグループに私はいましたけれども、そういうことなら私は失礼いたしますと辞めた。

私には分かりません。頭では絶対に分からない。けれども、キリストがかく証言し、かく事実なされた。聖書が偽りでないかぎり、また、キリストの霊生というものが我々の一切の知情意の判断を乗り越えたもの凄い事態であるかぎり、ただ平伏して、

「確かにそうでしょう」



と受けとる。もの凄い現実です。私は驚嘆し賛嘆する。驚嘆し賛嘆すると、何だか知らんけれども、自分がその生命の中に入れられていく。私は一番霊的でない部類の男です。一番霊的なことに對して疑っているのは男です。けれども、これが端的に受けとるんだから、これは仕方がない。

「先生は霊的だから、お分かりでしょうが」

というように、そういう先生なら、あなた方も多少分かるかもしれない。私はそういう先生でないんだ。

ところが、これがさっき言った「万理一空」の無の世界なんです。

「私は何ものでもない」

というところにキリストで入れられたら、もの凄い本当の霊の世界に、根源の霊の現実の中に入れられる。現象面はどうでもいいですよ。そういうことが普通の神学者や牧師さんには分かん。だから、何か現象が起きると、何だかんだと言う。

「現象の奥の世界を知らんか。現象を通して奥の世界に入っていくんだぞ」

と言いたい。せつかくの現象的関門を通っていく青年を何のかんの言って、その青年はその現象的な関門を通ってさらに奥にいよいよ入っていくというのに、なぜ水をかけるか。

「聖霊の事態に逆らうならば、その罪は赦されない」

と書いてある。私は神さまがどうなさるか知らん。聖霊ということはキリストの霊です。霊の世界にはいろんな霊があるからね。贖罪を成し給うところの実力を持っているキリストの霊です。

●あるがままの自分を投げ出す

8ここに彼らその御言を憶い出で、⁹墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。

どの福音書を読みましても、マグダラのマリヤが一番先に出てくる。マグダラのマリヤは、なかなか始末の悪い女性だったらしいですが、これがとにかく一番救われてしまった。

「こんなのはどうかな」

なんて思ったのが、一番素晴らしいことになってしまった。そして本当にキリストの第一の実証者に、証言者になってしまった。

十字架のキリストと一緒に一番先に天界に入っていたのは、片一方の盗賊だよな。

「汝、今日、我と偕にパラダイスにある」

と。かなり悪いことをしていたがアカイなんてのも、

「イエスなんてどんな人か」



と思って、木の上に登ってみた。それが、

「今日はお前の所に行つて泊まるぞ」

なんて、まず意表を突いたようなことをイエスは仰る。それは彼が全身をもつて自分を見ようとしたその気構えにキリストは喜ばれた。「お前の所に行つて泊まるぞ」と。それで一家が救われてしまった。

いいですか。無とは何かというと、「あるがまま」ということです。

「あるがままの自分を投げ出す」

ということなんです。あるがままで――それでお終いではないですよ――あるがままの自分を投げ出すんです。あるがままの、ちつとも作らないでね、あるがままの自分をキリストの中へ――どこかそこらへ、路傍へなんか投げてはダメですよ、

「この酔っぱらいはどうしたか」

なんてね(笑)――キリストの中へ投げ入れるんです。これが本当の無の姿です。キリストは無条件に受けとられる。無というと、無私だというと、

「なかなか、私は私がとれませんで、その無私は困ります」

なんて言うけれども、私のいう無は本当に虫のいい無私でありまして、

「あるがままの自分をキリストの中に、十字架の主の中に投げ入れる」

ことです。キリストは、

「いや実に私はお前が投げ入れる先にちゃんとここにお前を受けとっているじゃないか」

と仰る。

「はい、そうでしたか。投げ入れたと思ったら、あなたが私を吸い入れて、御腕を

もつて私を捕まえてくださったんですね」

なんていうわけですよ。そういう気合が、どうして本ものにならないでしょうね。

いいですか。あなた方は坐つてじつとしているけれども、私の今語っている現実はその凄惨な現実ですよ。もの凄惨な動的な現実を――静中動ありといって、あなた方は静かに坐っているが――動的な魂で受けとつてなければ、どうにもならん。時々、しやれを言つてすみませんが。いやいや、本当にこれはもう、左顧右眄することはなくなつた。

11使徒たちは其の言を妄語たわごとと思つて信ぜず。

と。なんていう使徒たちだろう。ダメだよ、こんなのは。けれども、私もここにいたら、ダメな方なんだ。使徒たちはダメだなんて、いい気なことを本当は言えない。とにかく、これは十字架の主がまだ本当に受けとれてませんから。あるところを通らないことには。使徒たちは彼らの言葉を妄言だと思つて信じない。

12「ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈かがみて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰り」



これはちつとも信じないんだ。怪しみつつ帰った。

「何だか変だな。キツネにつままれたようだ」

と。キリストの言葉がひとつも身についてない。

「お前たちもついにみんな私を棄てる時がくる」

と。けれども、その先をキリストはちゃんと見ている。

「二遍は棄てるだろうが、必ずお前たちは本当に私と一つになるぞ」

というわけです。

●二人の旅人の開眼

そこで今度は、13節から別な場面が出てくるわけです。それは驚天動地の現実だから、それは無理もない。

「墓が開けられて、天使が現れてきて、どうのこうの」

なんて言うからね。

13 視よ、この日二人の弟子、

復活の日の午後のことです。

エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオという村に往きつつ、

エルサレムから北西の方に向かつての道です。私もエルサレムに行った時に、「この道が昔エマオへの道と言われた道ですよ」なんて人から聞いたけれども。

14 凡て有りし事どもを互に語りあう。15 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。

まあ、何という光景だろうね、これは。

16 されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。

わからん。この霊的な次元は見えない。けれども、はつきり、復活のキリストはちゃんと話しているんだ、幽霊じゃないんだから。

17 イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』

知っていらつしやるけれども、しらつとぼけて、そんなことを聞いた。

かれら悲しげなる状にて立ち止り、18 その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事

どもを知らぬか』

とんでもないやつだと。おもしろいね、この会話は。

19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、

彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、

桁違いな力ある預言者です。

20 祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけた



り。²¹我らはイスラエルを贖^{あがな}うべき者は、この人なりと望みいたり、

「贖^{あがな}う」といったつて、これは本当の意味の「贖^{あがな}う」ではないんですよ。本当の贖^{あがな}いということを知らないものだから、政治的な気持ちで言っている。政治的な解放をして、大いにイスラエル国を建てていく。今のイスラエルみたいなことを思っていたわけだ。しかし、ただ、今のイスラエルだけではしょうがない。イスラエル人が本当にキリストを受けとるクリスチャンに本当に還るか、そこが問題です。

然^{しか}のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、²²なお我等のうちの或^{ある}女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝^{はや}夙^{ふく}く墓^{はか}に往きたるに、²³屍^{しかばね}体^{たい}を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩^{ともがら}の数人もまた墓に往きて見れば、正^{ただ}しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』

そんなことを言つて、うわさをしていたわけだな。

²⁵イエス言い給う『ああ愚^{おろか}にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍^{にぶ}き者よ。²⁶キリストは必ず此^こらの苦難^{くるしみ}を受けて、其の栄光に入るべきならずや』

いろいろな迫害を受け、ついに十字架にかけられ、そして、

「栄光に入る」

とは復活し昇天することです。復活し昇天する、そうならざるを得ないところの人ではないのかと。これは三人称的にキリストは語つていらつしやるわけです。自分をキリストとしてまだ願さない。

²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就^つきて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。

おもしろいね。潤々と旧約の事態、イエスの預言の事態を――特に預言書がそうでしょう――これを語られた。イザヤ書に一番多くある。特にイザヤ書53章がその話題だったと思います。ミカ書にもある。ゼカリヤ書にもある。エレミヤ記の後ろの方にもある。これは当のイエスが語られるんですから響くわけですよ、何か知らんけれども。

²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、

楽しくてしょうがないんだ、キリストは。この二人の旅人にいくらでも話してやろうと、夜もすがら歩こうと思った。我々も本当に御霊に満たされて一緒に歩きだしたら、それは果て知らず歩きたくなるわけです。ところが、夕方になったものだから、

²⁹強^しいて止^{とど}めて言う『我らと共に留^{とど}め、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』

乃^{すなわ}ち留^{とど}まらんとて入^いりたもう。

「それでは、まあひとつ入ろうかね」と。

³⁰共に食事の席に著^つきたもう時、パンを取りて祝し、擘^さきて与え給えば、³¹彼



らの目開けてイエスなるを認む、

最後の晩餐の時にかぎらず、キリストがパンをさき祝してという、そういう姿をかつて見て知っている。それで、ハッとしたわけだ。「あれっ」と。そして、その時に、

「いや冗談じゃない、これがキリストか」

と驚いた。あの第6号（贖愛新書6号『キリスト道』）の表紙があれです。レンブラントのあの絵の後では、キリストが見えなくなってしまうている絵がある。そこにただ光だけ射している。そして、二人の旅人が茫然としている。私はレンブラントの絵のうちでああいうのが一番好きだな。ある意味において、開眼したわけです。

●キリストの勝利を与える

皆さん、人生の瞬間に、「ハッ」と違った次元の光、事態を受けとる瞬間がある。皆さんが、あるいは本を読んでいようと、あるいは何か仕事に没頭していようと、とにかく、祈り心をもつてしているところには――祈り心が大事です――その時に、ある何でもないような、そこに出てくるところの普通の現象を通して、神さまが示してくださることがある。そうでない人にはそれは何でもない普通のことなんです。ところが、そのような人にとっては、その何でもないようなことが――私なんかは、テレビや何かの光景や、そこから響いてくる言葉や、それから道を歩いていて他人が語っている言葉のある一句が、私が過ぎゆく時にパツと入るでしょ。その句がパツと来ることがある。不思議だなと思う――これが示しになる。これは体験してみなければ分からない。

そういうわけで、イエスは至るところで私たちに語りかけておられる。また自らを顕しておられる。何か作為的にさぐる必要はないですよ。けれども、「ハッ」と気づかされる。

また、非常に悩んでいる人、困っている人、悲しんでいる人、そういう人のために本当に、

「大丈夫だよ」

と言って祈ってあげる。

「大丈夫かな、どうだろうな？」

なんて、そんな気持で祈ったってダメですよ、常に勝利の角度から祈らないと。祈られる対象に対して本当にキリストの勝利を与える、その角度から祈りなさい。たとえ、その現在時においてどんなに聞かれないように思われても、絶対に神さまは聞いておられる。勝ちます。どんなことがあっても、キリストは勝ってくださいますから。その点では私たちの信とは100%です。だから、私は聖書のこの頃の訳に「成るであろう」なんて訳されていると嫌になってしまう。信仰の世界には、「であろう」なんてものはないんだから。ずばり、「成る」と訳さなくては。キリストという神の言は必ず成る。それを「誠」という。まことの世界です。「うそとまこと」なんていうね。そのまことの世界です。

私はいずれ詩を書きます。けれども、私の詩は「ディヒトウング」(うそ)ではなくて「ヴァー



ルハイト」(まこと)です。決して、頭でひねりだしたような詩は書かない。この矛盾、不合理だらけの世の中を、闇の世を救いあげるところのキリストの新天新地はまことです。希望は即、現在です。もの凄い信の世界です。だから私は

「信は即、現である」

と申している。それでなければ、私にこんな生命はないですよ。

「小池先生はどうしてあんなに元気がいいか」

と。それは元気をいただいているんだから、元の気を。神さまの元もとの気を、キリストの元の気をいただくだけです。キリストの元の気をいただかないで、

「元気を出せ」

なんて言ったって、そんなのは空元気です。あなた方は元気を本当にいただいでくださいよ。しよげたりしたらダメです。いろんなことに出つくわせば出つくわすほど逆に力をいただく。いいですか。

何といったって、キリストの甦りの生命は、これほど決定的な勝利は世の中にないんです、もう世界がどうひっくり返ったって。このキリストの前には本当は降参しなければならぬ。今は本当に悪霊の百鬼夜行の世界で、青年暴力時代でとんでもない。そんなものはみんな暴力のゆえにひっくり返っていくだけの話です。一体何ですか、それに本当の怒りを持たないというのは。日本人は一体、魂があるかと言いたくなる。畏おそるべきものを忘れるくらい恐ろしいことはない。

●平安なんじらに在れ

それで、目が開きました、

「ああ、この人がキリストである」

と。さあ、驚いた。

而してイエス見えなくなり給う。³²かれら互に言う『途みちにて我らと語り、我ら

に聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

と。ルカ伝12章に、

「この火燃えたらんには、また何をか要せん」

とある。何か知らんけれども、燃えてきた。この「燃え」が、その炎が消えてしまったら、また、消してしまったら、消されてしまったら、ダメですよ。

この「火」という字は、人間が「万歳！」という姿です。おもしろですね。だから、本当に神さまの霊をいただいで、両手をあげて

「万歳！ ハレルヤ！」

と言うのが、この「火」なんです。聖霊をいただくとそういう姿になる。火がつけられる。

³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、



はい、直ちに立った。もうグズグズしてられない。マルコ伝というのは「直ちに」という福音書です。マルコ伝を読んでごらん下さい。「直ちに」という言葉がたくさん出てくるから。非常に行動的なんです。もう居ても立ってもいられないんです、キリストにでつくわしてしまつたから。

「お前さんは知らないか」

なんて言つてたのがとんでもない。この「お前さん」というのがキリストだったから、これくらい驚いたことはない。申し訳ない。

●エルサレムに帰り見れば

もうこれはいだてん走りに走つて行つた。

十一弟子および之と偕^{とも}なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘^さき給うによりてイエスを認めし事を述べ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち

はい、また現れたですよ。「その中」というのは彼らすべての中に、

『『平安なんじらに在れ』』³⁷と云い給う。

「平安なんじらに在れ」

というのは、イスラエル人の「こんにちは」とか「さよなら」という言葉でも同じ言葉で言うんですが、この場合はもちろんそんな挨拶ではない。そのまま文字通りの意味です。へブライ語で、

「シャーローム・ラーケーム」「お前たち、心安かれ、安心しろ」

何も騒ぐことはないと言う。

³⁷かれら怖^{おそ}じ懼^{おそ}れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、

まだダメなんだよ、言われたつて。何か幽霊かと思つた。

³⁸イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒^{うたが}ぐか、何ゆえ心に疑惑^{うたが}おこるか、

キリストのそれだけの言葉を聞きながら、心騒いだり疑つたりしている。

●まことに不思議なこと

N君の奥さんがいつか幽霊が入ってきたのを見た。Kさんと病室で一緒に寝ていたら、明け方にドアが開いた。紫色の衣を着た女の人が入ってきて、Kさんの枕元にきて、何か感謝の意を表して、またスーツとドアを閉めて行つてしまった。N君の奥さんがそれを見て驚いてしまった。全然知らない人だものね。しかしもう、この信にきたら、ああ素晴らしいなあと思う。一緒に歩きたくなるかもしれない。霊の世界はまことに不思議なことがあるわけです。霊が衣を着てくるんだからね。その衣の模様がちゃんと、生きていた時に



着ていたのと同じ模様のものだったという。私はどういふことだか知らんですよ。しかし、事実なんだから、仕方がない。

いわんや、霊生をもつて顕れるところの實力そのものであるところのキリストに会って、彼らはあまり次元が違うものだから、おじ恐れてしまった。その通りに書いてある。

何か現象が起きると、あれは自己欺瞞ではないだろうかとか、何とかかんとか言って躓く人がある。こないだ、私はD大学のキリスト教研究会の青年8、9人の人たちと宇都宮で3泊4日の集会をした。もう初日から――青年諸君が

「先生、大いにやってください」

と言ったから――遠慮なくやった。今ここに2、3人来ていらつしやるが。そしたら、えらいことが起きてしまった。そうすると、一部のご連中がこれに躓いた。それで何のかんのと言う。お気の毒なわけです。本当に魂の火花の散る世界を、横から何のかんの言う。これが疑いの世界、自己が何者かである世界、本当の捨身の求めがない世界です。はつきり分かれてしまう。これは仕方がない。本ものといひ加減なものとは分かれてしまう。これは止むを得ない。けれども、その人たちをなるべく躓かせまいと思って、私はあの方で少しブレーキをかけたなら、

「先生、ブレーキかけましたね」

なんて言われて、少し申し訳なかったけれども。

こういうキリストの問答を、単なる言葉ではないこの現実を見て、私たちはキリストの今もなお生きてあり給うところの永遠の主をみる。いつでも、このエマオ途上の旅人のごとく、2、3人で歩くときには、もう一人加えなくてはいいかん。いや、加えなくてはではない、キリストは加わっていてくださる。どんな夜道もちつとも恐くはない。

「行こう、行こう」

なんて言ってね、

「何か知らんが、先が明るいな」

なんて。

ある牧師さんが北海道で伝道していたときに、道に往き暮れた。吹雪になつてきて、西も東も分らない。仕方がないから、雪の中に端坐して祈った。そしたら、一方がスーッとそちらの方だけが妙に雪が晴れている。

「はあ、こちらへ行けというお示しだな」

と。そちらへ行ったら、村に出たという。甦りのキリストと祈って歩いているような牧師さんです。また今度は、伝道していて、森の中に入って日が暮れてしまった。仕方がない、そこで一夜を過ごそうとした。まことにヤコブのようなものだ。草枕、石枕という。何も食べないものだから、お腹がすいてきた。そうすると、上からポトン、ポトンと落ちてきた。何かと思ったら、リスがクルミを落とした。そのクルミでその晩の露命をつないだという。



これは事実その人から話を聞いた。そういうのが本当の伝道者です。その人は私の家にやって来ると、すぐ

「祈りましょう」

といきなりくるんだよな。その人の言葉を聞いていると、ほとんど聖書の言葉がもう自分の言葉になってしまっている。

「伝道者になると、貧乏で困るの、困らないの」

なんてなこととはおよそ世界が違う。エリヤ、エリシヤの昔をみましても、いわんやこの使徒たちは、また私たちも、どのような現実に向かっても、それで決して困ることはない。そういう事態を日々の生活の中で質的には受けとっていかなくてははいかんわけです。

ウエスレーが、食器がないので、奥さんと一つのスープの皿から一つのお匙で代り番に飲んだという。私はあの一節を読んだときに、何とも言えなかったですね、これが本当の世界だと思った。人間の生活というものは、魂と心の本当に火花の散る世界、これが本当の生活です。その他のことはどんなに良さそうにみえても、みなうわつつらなことです。

●十字架の主と復活の主は離すことができない
この

「平安、なんじらにあれ」

ということ。ところが、あいかわらずダメである。仕方がないから、イエスは実証した。

³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫^なでて見よ、霊には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし⁴⁰「斯く言いて手と足を示し給う」⁴¹かれ

ら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、

まだあいかわらず怪しむ。

イエス言いたもう『此^{ここ}処に何か食物あるか』⁴²かれら炙^{あぶ}りたる魚^{ひとぎれ}一片を捧げ

たれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

およそ、これほどの現実が世の中にあるかという。疑う者をして疑わしめよ、その人はただ疑いの魂でおしまいというだけの話です。

親鸞か、「大愚」と言ったのは。福音の現実、霊的な現実に対しては、本当に大愚となつてこれを受けとるのでなければ、本当の大賢の世界には入れない。世の中の第一流の神学者が何と言おうと、そんなことでびくともしない。男でも女でも、老いたるも若きも同じことです。

「一切の差別なし」

とパウロが言った。パウロという人は何というやつだと思う。まあ、書簡を読んでいて、もう本当に自在なんです。何も神学なんて、彼はそんなことは考えていやしない。あまりに自在で凄い事態が表れて、神学者がこれをどうのこうのとやったって、始末がつかない。「万



理一空」の事態を受けとった人は、パウロを読んで、

「ああ、そうです、その通りです」

と、どんどん読めてしまう。何も難しくはない。楽しくてしょうがない。力が来てしょうがない。

44 また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』

「みんな私はそれを言っただじゃないか。その通りなんだ」と。

45 ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、46 『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、47 且その名によりて罪の赦を得さる悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの^{くにびとのべつた}国人に宣伝えらるべしと。48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』

これは使徒行伝の最初のところに出てくるところと相応えるところです。証人となるためには、力が来なくてはいかん。その力は何であるか。霊能と書きたい。この霊能が来る。霊能とは即ち御霊の力ですよ。御霊の力、力ある御霊です。

「御霊とは何かな」

なんて思っただけですよ。さつきから申しあげていっているとおり、あるがままの自分をキリストの中に本当に投げ入れてごらん。聖霊の事態に入ってくるから。

「祈り」とは何か。申しあげていっているとおり、己を投げ入れることです。己を十字架・復活のキリストの中に投げ入れることが祈りです。そうしたら、この力ある事態に必ず来ます。いかなる人も例外なしに必ず来ます。強張ったまんま、分裂のまんま、傲慢のまんま、疑いのまんま。いいですか、そのまんまを投げ入れて、もはやそんなことを省みない。

「自分は傲慢である、疑いである」

とか何とかと省みない。投げ入れるときは、そのときにはもう本当に渾然として投げ入れてしまう。だから、私は、

「信仰は一番根源的な行である」

と言う。「信即行」というのはそのことです。一番内的な行為なんです。そのときに、恥も外聞もへつたくれもないですよ。人間というものは作っているうちはダメなんです。作られたものは、お体裁はみんなダメです。

「我こそは」

と思つていたところのパウロのやつがとうとう、

「お前は全くしょうがない野郎だ。熱心は熱心だが、とんでもない自己中心の熱心だ」



というわけで、これを復活のキリストがダマスコ途上で現れて、ひっくり返してしまった。「何事かつ。なんぞ、我を迫害するか」

と。パウロはおつたまげたですよ。晴天の霹靂へきれきの声だ。太陽よりも素晴らしい光に撃たれて、彼はぶつ倒れた。それで初めてアナニヤによつて開眼されてから、今度は荒野に退いて深く祈った。そしたら、パウロに示されたものは何であったかというところ、この十字架であった。復活のキリストに撃たれて、あとから彼は本当に十字架をつかまえた。パウロにとっては、十字架の主と復活の主は離すことができない。これはキリストの復活の勝利です。キリストは本当に甦よみがえった決定的な勝利です。

「この勝利をお前たちにやるぞ。お前たちは本当に、どのようなことがあってもこの勝利の人となれ」と。

●倒るるは起たんがため

私はこないだの東西宗教史自由解説の時間にブラウニングを紹介しました。彼の辞世の詩「エピローグ・ツー・アソランド」の中にこういう句があるから皆さんにも紹介しておこう。

断じて背そむを向けしことなく

真向まむかいに突き進み、

むら雲の霽はれゆくをつゆ疑わず、

正義の不況にも邪惡の勝利を

夢かみしこと嘗かつてなく

倒るるは起たたんがため、

挫折くずおするは更に善く戦わんため、

眠るは醒めんがためと確かたく信ぜし者ぞ。

然り、真昼まひるとき時、活動はたらき繁きただ中に、

去り逝く者を歎呼して送れよ！

向背は問うにや及ぶ、ただ命ぜよ前進を。

「敢闘！ 栄光！」と呼べ。また叫びてよ、

「勇躍、邁進、絶えず前進、

彼岸なお 此岸の如く！」と。

決して自分の背そむを向けたことのない者、

後ろ向きになったことのない者。

前進のみ、胸をはって前進したところの者。

というのは、ブラウニングは自分のことを言っているんです。

密雲が破れるということを決して疑ったことがない者

必ず陽が射してくる。



正しいものが打ち破られても、

決して間違った者が勝利を得るということを夢見たことがない者

必ず正しい者が勝つ。間違った者は倒れる。

倒れるのは必ず起き上がるためである。

挫折するのはよりよく戦わんがためである。

眠るのは覚めんがためである。

人生の真昼時に、

ブラウニングはもう老年ですよ。彼は老年でも、いよいよ盛んなる魂だから、自分の老年のことを「真昼時」と言った。

また仕事をしている最中に、私は見えざる者になってしまふ。

即ち、次の世界にいくという。

この見えざる者を歓呼をもって送ってくれ。

歓呼をもって、

「ブラウニングさん、万歳！」と言ってくれと。そして、

彼になお前進せよと命令せよ。もつ胸も背中もない。

ということは、ただ全身をもつて前進せよということだ。

「戦いまた榮えよ。急げ。なお戦い続けよ。もつといよいよ進め。

彼岸の世界においてもこの地上におけるがごとく」と。

なんと盛んな魂だろうと思う。辞世でこれくらい勝利的な、死に完全に打ち勝った詩が他にあるかと思う。私はブラウニングが大好きだ。我々の信仰に非常にぴったりしたものを持っている。もし、英文学を専攻すれば、私はブラウニングに没頭したいと思うくらいです。キリストの御霊におけるところの生命をいただいた者は、私たちはもはや後退を知らん。どんなことがあっても、

「^せ為んかた尽くれども^{のぞみ}希望を失わず、倒さるれども滅びず。これキリストの死を負い、キリストの生命にあずからんがためなり」

とパウロが言った。鎖につながれても、

「喜び喜べ」

と言ったパウロはなんとという勝利の姿か。彼の中にキリストの生命が、復活の主の生命が燃えていた。彼は復活の主の証人として、その地中海のいたる所をもろものの艱難を通して伝道をした。

伝道というのは道を伝える。キリストという道を伝える。そういう意味で、私は伝道という言葉が非常に好きになってしまった。皆さん一人びとりが本当にキリストの道を身をもって伝える人です。ただ言葉ではないよな。そういう事態です。



●聖霊なんじらの上に臨むとき

「祈りをもって待っている」

と。これは使徒行伝1章のところに、

「エルサレムで祈りをもって待っている」

とあったでしょ。

「⁸然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力^{ちから}をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極^{はて}にまで我が証人となれ」(使徒行伝1:8)

と。聖霊を受ける時に初めて私たちの中に復活の主が生きてあり給うということがはつきりする。

そういうことで、我々は本当にこの復活の主の勝利をいただいた勝利の人です。

「戦闘の教会」

と言うけれども、同時にその「戦闘」は勝利の戦いのわけである。牧師さんたちがその気魄とその歓びを持たないで牧会していたら、そこに来る魂に対して申し訳ないことだと私は思っている。私はかつてそうでありました。申し訳ない人でした。けれども、ある時から本当に変わってしまった。仕方がない。

特に青年諸君は、今は滔々^{とうとう}たる悪の霊の世の中で、これにいい加減な信仰では勝てませんぞ。しかし、この御霊の事態にあつたら、

「千万人といえども我行かん」

というものがはつきりある。それで、

「いや、あいつはどうも」

という本当に違つたことになります。何と言われようと、そんなことでびくともするどころではない。かえって逆に強くなつてくださいよ。ことに身内の方々がなかなかこれが躓くわけだ。

「ああ、預言者は故郷にいれられず」

と、イエスもナザレを出てしまった。しかし、神の民が本当に地を嗣ぐのである。

「幸いなるかな、悲しむ者」

という。キリストのゆえに悲しみを担う者は本当の慰めを受ける。また、人に本当の慰めを与えることができる。もう何とも言えないです。この熾^{さか}んなる勝利をもって、どうぞ、この春から夏にかけていよいよ、皆さん、特に大学生諸君はいろんな波がさかまいているが、何をかというものを持って進んでください。では。

